

恭翁運良・孤峰覚明と初期曹洞宗教団

佐藤 秀孝

はじめに

鎌倉中期に入宋求法して『無門関』の作者として名高い臨済宗楊岐派の無門慧開(仏眼禪師、一一八三—一二六〇)に嗣法して帰国した禪者に無本覚心(心地房・法燈円明国師、一二〇七—一二九八)という人が存しているが、彼の系統は法燈派あるいは本山である紀伊(和歌山)愚由良の鷲峰山西方興国寺にちなんで由良派と称されて中世禅林の一角を形成している。覚心の数多い法嗣らの中で、とくに恭翁運良(初名は元琳、仏恵禪師・仏林恵日禪師、一二六七—一三四一)と孤峰覚明(国済国師・三光国師、一二七一—一三六一)という二禅者に注目する理由は、この両者がともに越前(福井)県志比の吉祥山永平寺の道元(仏法房、一二〇〇—一二五三)の門流である曹洞宗教団と密接な関わりを持ち、中世における曹洞宗と臨済宗の交流の歴史において看過しがたいものが存していることによる。

運良と覚明とともに鎌倉末期に奥羽(東北地方)の地に生を受け、覚心の席下で修行した後、南北朝の動乱期にかけて独特の活動をなした禅者である。しかしながら、両者の生き方には対照的なものが見られ、運良の方は京都や鎌倉

の中央禅林から逃れるかのごとく加賀（石川県）や越中（富山県）に化導を敷き、朝廷や幕府の権力とも無縁であったかの感があり、仏恵禅师や仏林恵日禅师というのも示寂後に賜った勅諡号にすぎない。これに対して、覚明の場合は初めはやはり中央禅林を避けるかのごとく出雲（島根県）に落ち着くが、やがて建武の新政から南北朝動乱の時世に後醍醐天皇（一二八八—一三三九、在位は一三一八—一三三九）や後村上天皇（一三二八—一三六八、在位は一三三九—一三六八）ら南朝方の帰依を受けて歴史の表舞台に登場し、和泉（大阪府）を中心に化導を敷いて南朝方の精神的支柱の一役を担っている。三光国師さらに国济国師という国師号も生前に兩天皇より賜ったものにほかならない。

ところで、いま運良と覚明の行動で注目する曹洞宗教団との関わりであるが、彼らとともに法燈派の臨济禅者でありながら、加賀の東香山大乘寺や能登（石川県）の洞谷山永光寺を中心によく全国展開への道を歩まんとしていた曹洞宗教団すなわち道元下四世の瑩山紹瑾（仏慈禅师、一二六四—一三二五または一二六八—一三二五）とその門流の曹洞禅者たちと深い関わりを持ち、中世禅林における洞济交渉の歴史に大きな足跡を残している。紹瑾はいうまでもなく曹洞宗発展の礎を築いた禅者であり、大乘寺や永光寺に化導を敷いたほか、能登に諸嶽山総持寺を開創したことで名高い。しかも、この洞济交流は運良と覚明の二人に留まらず、その法嗣や法孫ら次世代にまで及んでおり、日本禅宗史上に看過しがたいものを内在している。ここでは運良と覚明の二人が紹瑾の席下に投じたことよって巻き起こった騒動と、これに対して曹洞宗教団が取った処置について考察し、その後における曹洞宗大発展の基がどのように築かれていったのか、などについて少しく論じてみることにしたい。

永平道元と無本覚心

そもそも法燈派と曹洞宗の間の交渉は、法燈派祖の無本覚心が若くして山城（京都府）深草の興聖宝林寺に赴き、曹洞宗祖の道元に参じたことに端を発している。「鷲峰開山法燈円明国師行実年譜」によれば、

丁亥、嘉祿三、十二月十日、安貞改元。師二十一歳。茲歲紀州海郡由良庄西方寺草創。(中略)于時十月十五日也。雖然未レ終レ成功、且請レ梅尾明恵上人明辨、扁レ寺曰レ西方。使レ永平寺仏法上人道元書レ額之篆。寺本尊阿弥陀像一鋪者、毘沙門堂明禪法印、開眼供養。(中略)壬寅、仁治三。師三十六歳。依レ城南深草極楽寺元和尚、受レ菩薩戒。元入宋時、從レ天童淨和尚相伝之血脈也。元乃永平開山仏法上人也。

と記されており、その間のいくぶん詳しい事情が伝えられている。すでに早く南宋から帰国した直後の安貞元年(一二二七)一〇月一五日に道元は紀伊由良の西方寺(後の鷲峰山西方興国禪寺)の寺号額を揮毫している。その後、一五年余を経た仁治三年(一二四二)に覚心が洛南深草の興聖寺(極楽寺址)に赴いて道元に参じ、道元より「仏祖正伝菩薩戒血脈」を受けている。道元はかつて東山建仁寺において明全(仏樹房、一一八四—一二二五)の弟子として出発し、覚心も鎌倉寿福寺の退耕行勇(莊嚴房、一一六三—一二四二)の弟子であったわけであるから、ともに明庵栄西(千光房、一一四一—一二二五)の門流として同じ流れに属する法孫であったことになる。

道元が覚心に伝えた戒脈の原本はすでに散逸して伝わっていないが、覚明に学んだ経験を持つ曹洞宗の無著妙融(真空禪師、一三三三—一三九三)が開創した豊後(大分県)の泉福寺にその写しが残されており、そこには戒脈の系統図につづいて臨済宗黄龙派の虚庵懷敏が南宋の淳熙一六年(一一八九)九月一五日に日本僧の栄西に戒脈を授けた内容が載せられ、さらにそれにつづいて、

大宋宝慶元年乙酉九月十八日、前住天童淨和尚示曰、仏戒者宗門大事也。靈山・少林・曹溪・洞山皆附「嫡嗣」。從レ如来嫡嫡相承到レ吾。今附「法弟子日本国僧道元」、伝附既畢。今覚心附「心瑜」。

時正応三年九月十日、覚心示。

という奥書が載せられている。これによれば、道元は明州(浙江省)鄞県の天童山景德寺において南宋の宝慶元年(一二二五)九月一八に曹洞宗の長翁如淨(一一六二—一二二七)より授けられた仏戒(仏祖正伝菩薩戒)をこのとき覚心に

付与していることが知られる。しかしながら、実際に道元が覚心に授けた戒脈の図によれば、このとき道元は如浄より相伝した青原下の戒脈とともに、明全から相伝した南嶽下の法統を受け継ぐ黄龍派の戒脈も同時に覚心に付与しているのであって、いわば曹洞宗と臨済宗の両系統の戒脈を併記していることが判明する。しかも覚心は仁治三年からおよそ半世紀を経た正応三年（一二九〇）九月一〇日にこの戒脈をそのまま門人の心瑜に付したわけであるから、晩まで道元から伝来した戒脈を重視していたらしい事実も確かめられる。

南宋から帰国した覚心はやがて由良の西方寺すなわち興国寺の開山に迎えられ、その流れはやがて法燈派として臨済宗の一役を担って展開しているが、運良と覚明の二人は覚心の晩年に興国寺に投じており、覚心の老熟した接化によつて育成された勝れた高弟であつたといつてよい。

また後代の史料で問題もあるが、『日本洞上聯燈録』巻二「能州洞谷山永光寺瑩山紹瑾禪師」の章には、
 南走_二中原、見_三万寿宝覚・白雲慧暁諸老。法燈坐_三南紀之興国、師往造、一見大賞_三識之、留過_二冬。

とあつて、瑩山紹瑾が諸方歴遊の折りに由良の覚心に参じて器重せられ、冬（冬安居）を共に過ごしたという記事も存している。

運良と覚明の伝記史料

運良に関する基本的な伝記史料としては、東京大学史料編纂所所蔵『名僧行録』巻二や花園大学禅文化研究所所蔵『禅林諸祖行状』四その他に所収される法孫比丘某甲が状した年時不詳（二五世紀初頭か）の「大日本国越中州黄龍山興化護国禅寺開山勅賜仏林恵日禅師行状」（表題が「加州瑞応山伝燈護国寺開山恭翁和尚行実」とも）が存しており、これは『大日本史料』第六編之六や『富山県史』「史料編」その他に活字化されている。また寛正四年（二四六三）九月に前南禅の肩書きで聖一派の華岳建曹（樵隱子・栗隱叟、？—一四七〇）が撰した「越之中州黄龍山興化護国禅寺開山勅諭

仏林恵日禪師塔銘并序」(表題が「瑞応山伝燈護国寺開山恭翁和尚塔銘」とも)も伝えられており、これは先の資料のほか「続群書類従」第九輯下などにも所収されている。ほかにも運良に関しては江戸期の燈史・僧伝として『扶桑禪林僧宝伝』巻六「仏林慧日禪師伝」と『延宝伝燈録』巻一五「加州瑞応山伝燈寺恭翁運良禪師」の章と『本朝高僧伝』巻二六「賀州伝燈寺沙門運良伝」および『大乘聯芳志』「前住恭翁運良和尚」の章などが存している。

一方、覚明に関する基本的な伝記史料としては、法嗣の河南聖珍(南洲)が南朝の正平一七年(北朝の康安二年、一三六二)一〇月に撰した「孤峯和尚行実」と、元末明初に大慧派の懶庵廷俊(用彰、一二九九—一三六八)が撰した「国済三光国師塔之銘」が存しており、ともに『続群書類従』第九輯下などに所収されて一般に知られる。このほか覚明についてはやはり江戸期の燈史・僧伝として『扶桑禪林僧宝伝』巻六「雲樹寺国済三光国師伝」と『延宝伝燈録』巻一五「雲州雲樹興聖孤峯覚明国師」の章と『本朝高僧伝』巻二九「雲州雲樹寺沙門覚明伝」が存している。また妙心寺派の無著道忠(一六五三—一七四四)が正徳二年(一七二二)八月にまとめた「雲州瑞塔山天長雲樹興聖禪寺開山両朝特賜国済三光国師碑銘」も貴重であり、これは「孤峯和尚行実」の説を受けて道忠がよくまとめたものである。こうした運良と覚明の伝記史料の中でも、とくに「仏林恵日禪師行状」と「孤峯和尚行実」という二つの伝記史料はともに曹洞宗の瑩山紹瑾の存在をかなり意識に入れて記されている点で特徴的である。そこで以下、この二史料を中心として運良と覚明が紹瑾およびその門流と如何に関わったか、その事跡について一考を試みることにしたい。

運良と覚明の参学

はじめに「仏林恵日禪師行状」や「孤峯和尚行実」その他に基づいて運良と覚明が参学した禅僧たちについてその系譜を載せておきたい。ただし、▽は運良が参学した禅者であり、▼は覚明が参学した禅者であり、(▼)とあるのは覚明が在元中に江南禪林において参学した禅者である。

(曹洞宗)

丹霽徳淳—真歇清了—永平道元—孤雲懷奘—徹通義介—[瑩山紹瑾]▽
 宏智正覚—東谷妙光—直翁可挙—[雲外雲岫] (▼)

(臨濟宗)

五祖法演—開福道寧—月林師観—無門慧開—[無本覚心]▽
 圓悟克勤—此庵景元—荆叟如珏—空巖—有—[元翁—信] (▼)
 虎丘紹隆—密庵咸傑
 [了然法明]▽
 [恭翁運良]

松源崇嶽—運庵普巖—虚堂智愚—[南浦紹明]▽
 滅翁文礼—横川如珙—[古林清茂] (▼)
 破庵祖先—無準師範—兀庵普寧—[翠微飽參] (▼)
 [了然法明]▽

(華嚴宗)

思田叡尊—実相房円照—[示観房凝然]▽
 無学祖元—[高峰頭目]▽
 雪巖祖欽—[方山文宝]—[無見先観] (▼)
 高峰原妙—[中峰明本] (▼)
 [断崖了義] (▼)

およそ、以上のようななるうが、入元帰国を果たした覚明の中国禅林における消息を除くと、運良と覚明が日本禅林で参学した禅者には共通している面が多い。すなわち、破庵派あるいは曹洞宗に属する了然法明(弘章、?—一三〇八)と、法燈派祖の無本覚心と、大応派祖の南浦紹明(円通大応国師、一二三五—一三〇八)と、曹洞宗の瑩山紹瑾という四人は両者がともに参学した禅者なのであり、この中で法明と覚心は道元と関わった禅者であり、紹瑾は道元下四

世に当たっている。

とりわけ注目すべきは、出羽（山形県）大泉荘に善見山玉泉寺（後の国見山玉川寺）を開創した了然法明の存在であつて、両者はともに覚心に学ぶ前後に法明に参随した経験が存している。すなわち、運良の「仏林惠日禪師行狀」には、

受業越之後州玉泉寺了然明和尚、十九歳遊方、登壇受具。

と記されており、僧伝や燈史なども同様の内容を伝えている。出羽の出身ともされる運良は玉泉寺の法明の席下に投じて出家受業しており、弘安八年（一二八五）に一九歳で法明の門を出て登壇受具したとされ、その後、由良の覚心に参学している。また覚明の「孤峯和尚行実」においても、

居三年、辭遊諸方也、聞羽州法明和尚者有道老宿也。師往見焉、自至法席、寢食共亡、幾乎不曉人事。隣僧僧、時々驚覺之矣。于時有僧、戲示片紙書云、力尽神疲無処覺、只聞楓樹晚蟬吟。師見之豁然有省、徑趨方丈、欲呈所解。明便見来、忽把地爐火筋而按背後曰、汝道、火筋今在甚处。師応声云、従来在和尚手裏。明首肯之曰、三十年後、坐断天下人舌頭在。

と伝えられており、僧伝や燈史その他もやはり覚明が同様に出羽の法明に参学したことを伝えている。会津（福島県）の出身である覚明の場合は、比叡山で受戒した後、由良の覚心に参じており、その後ただちに出羽に赴いて法明の門に投じている。覚明は法明の席下で寢食を忘れて参禅学道に努めており、『十牛図』の語句にちなむ参究などを通して法明の実地の指導を受けている。

法明については関連史料が少なく事跡も不明な点が多いが、『洞上聯燈録』巻一「羽州玉泉寺了然法明禪師」の章などによれば、高麗国（朝鮮半島）の出身とされ、入宋して杭州（浙江省）余杭県の径山興聖万寿禪寺において破庵派の無準師範（仏鑑禪師、一一七七—一二四九）に参学したとされる。その後、法明は觀光の志し止みがたく来日を果たしたとされ、出羽の羽黒山下に檀信の帰崇を得て玉泉寺を創建している。ところが、法明はさらに遠く越前の永平寺に晩

年の道元を訪い、問答商量の末にその印記を得たとされている。法明が果たして正式に道元の法を嗣いだか否かは問題もあろうが、その門に投じて短期間ながら道元の教えに浴したのには事実であったものと見られる。この法明との関わりが運良と覚明の両者をして後に曹洞宗に接近させる遠縁ともなっているようである。「仏林恵日禪師行状」に載る運良と法明との関わり、「孤峰和尚行実」に載る覚明と法明との因縁は、歴史の彼方に消えた感すらある高麗僧法明の存在を今日に甦らせてくれる貴重な史料なのである。

運良と瑩山紹瑾の関係

ところで、問題なのは運良が法明の席下を去つて一九歳で受具した後、ただちに能登永光寺の紹瑾に参学したとする記事であろう。「仏林恵日禪師行状」によれば、

初参_二洞谷瑩山瑾禪師_一、周年之間、尽得_二曹洞之旨趣_一。於_二其授受之際_一、乃自惟曰、禪有_二伝授_一、豈仏祖自証自悟之法。遂棄_二之_一。(中略) 既而辞去北遊。先是、師在_二城南深草_一日、瑩山商_二量師劍刃上話_一、因約以_二加州休息之地_一。

とあり、「仏林恵日禪師塔銘」においても簡略ながら「初参_二洞谷瑾禪師_一、旁搜_二曹洞之旨_一」と記されている。しかしながら、運良と紹瑾はほぼ同世代であり、運良が一九歳で法明の席下を去ったとき、紹瑾もいまだ二二歳か一八歳でしかない。まして紹瑾が正式に能登の永光寺の開山となるのは文保元年(一二三二)とかなり後のことであり、この時期にすでに運良が永光寺の紹瑾に参学する可能性はあり得ない。

しかも「仏林恵日禪師行状」では、運良が曹洞の宗旨を得て紹瑾より法門を伝授されんとしたときに「禪に伝授有り、豈に仏祖自証自悟の法ならんや」と感じ、紹瑾の示す禪を捨て去ったことになっているが、これもまた問題の記述といえよう。この記事は後に述べるごとく曹洞宗との確執が表面化した事実を踏まえて考慮しなければならぬ内容と思われる。

その後、無本覺心や南浦紹明ら諸師に歴參した運良は、洛陽城南の深草の地で再び紹瑾に会う機会を得て問答商量をなし、紹瑾から加賀の地に赴くように諭されたとされる。また『洞谷五祖行実』「洞谷第一祖勅諡仏慈禪師瑩山和尚行実」では、運良は紹瑾より仏祖正伝菩薩戒を授けられたことになっている。

さらにこの時期に運良は逆に瑩山門下の峨山韶碩（韶碩とも、一二七六一—一三六六）と明峰素哲（初名は常禪、一二七七一—一三五〇）を育成する機会にも恵まれている。運良が会下に到った韶碩を育成した機縁を「仏林恵日禪師行状」は、其徒峨山積（積）又問劍刃上事瑩山。山曰、你往見琳公、佗必能成就這話。便賣書去見師。師一日命積剪紙、風吹翻、以刀尺鎮之。師曰、此是風力所転耶、抑亦你転処耶。積即舉所持尺。師曰、你我弟子也。積曰、祇承師証明。走出。

と伝えており、これによれば、紹瑾の指示で運良に參じた韶碩は風に舞う紙にちなむ商量によつて証明を受け、運良から「你是我が弟子なり」とまで称えられている。

また運良が素哲を育成した機縁を「仏林恵日禪師行状」は、

瑩山又付書明峯哲、成問師于不識話。師相对只寒暄而已、渾無言說。哲亦不肯拈話、留七宿而辭。師以一緘報之、回呈瑩山曰、這僧參得不識話了也。哲聞之当下知解氷積。

と伝えており、この点は素哲の伝記史料である「光禪開山老和尚行業記」においても、

師一日侍山、因請益達磨不識話。山乃附書、令參恭翁良禪師。良相見、唯伸寒温耳。師又不拈話、而七宿既去。良返簡云、這漢透徹不識之話了也。師聞之云、明眼宗師為我發裏也。

と記されている。素哲の場合は「達磨不識話」を參究していた折りに、紹瑾が素哲を運良のもとに遣わし、運良が暗黙の内にその意に應えて素哲に不識の真意を示したものであり、運良の接化に対して素哲は明眼の宗師と絶賛している。両者が運良に參学した場所などは明記されていないが、ともに紹瑾の指示によつて運良に參学して知解が氷積し

ており、親しく運良の印可を受けている。このように紹瑾の門下を代表する紹碩と素哲という二高弟がともに運良の指導によって育成されている事実は注目すべきことといえよう。

さらに『越中古文書』巻一〇「水見光禪寺書類」には、

越中州海慧山光禪寺二代松岸旨淵禪師、姓藤氏。加州人也。自幼俊邁、不_レ伍_二塵俗_一。受業於大乘鑿山禪師。遊歷為_レ志、參_二諸名宿_一。延慶_二応長_一、之_レ礼_二恭翁良禪師于州三伝燈_一。良一見_レ口器不_レ問、晨夕脇不_レ沾_レ席。正中乙丑、明峰禪師、董_二能之洞谷_一。師眷々依_二止焉_一。

という記事も見られ、後に素哲の法を嗣ぐことになる松岸旨淵（旨因とも、？一三六三）も大乘寺の紹瑾に得度を受けて後、運良に参学する機会が存して真摯な参禅をなしたとされている。

「仏林恵日禪師行状」によれば、運良は紹瑾との盟約を果たすべく加賀の大乘寺に赴いたわけであるが、やがて紹瑾は運良を大乘寺の新たな住持に迎えている。運良が紹瑾の後席を継いで大乘寺に出世開堂した様子を「仏林恵日禪師行状」はつぎのごとく伝えている。

師逐北矣、即空_二大乘寺_一令_レ為_二住持_一、依託以_二一夜碧岩并棕欄_一弘子_レ応器等。昔如下_二大陽玄_一以_二皮履布襪_一寄_二浮山_一山鑑、誠有_レ以乎。師南面行事、鐘鼓魚板一時改響、其演法也不_レ為_二徳山_一、殆乎為_二臨濟_一。經_レ歳学徒益盛。

これによれば、紹瑾は大乘寺の住持の座を空けて運良に後席を譲っていることになり、このとき依託する証として大乘寺ないし曹洞宗の宝物ともいへべき一夜本『碧巖録』や棕欄の弘子さらに応量器などを付与している。しかも、そのことをかつて北宋末期に曹洞宗の大陽警玄（明安禪師、九四三—一〇二七）が臨済宗の浮山法遠（遠録公・円鑑禪師、九九一—一〇六七）に大法を依託した「代付」の故事に準えている。「仏林恵日禪師行状」ではこの間の事情がなお定かでないが、「行状後序」において建青は運良の示寂後一世紀を経た頃の伝承口碑としながらも、

越之興化禪寺開山勅諭仏林恵日禪師実録、予周覽者數十回矣。一字無_レ曾可_二増損_一者、実得_二僧史之筆_一、乃今遷固也。然有_二

一段脱所。且聞、師欲到_レ大乘寺之前夕、瑩山夢_レ鷹來集_二于山門上_一。厥貌太俊、山怪_レ之。翌日師至、便原_二前夢_一、延侍_二首座寮、瑩山謂_レ衆云、欲_レ參_レ余者、參_二首座_一。衆僉參_二首座_一。於是山避_レ席、師南面行事、云々。是口碑之所_レ傳也、姑書_二以作_二褚少孫之補_一云。

という興味深い記載を残している。これによれば、運良が大乘寺に至る前の晩に紹瑾は多くの鷹が山門の上に集まっている夢を見ており、その姿がきわめて勝れていることを怪しんだとされる。翌日に運良が大乘寺に到ったため、紹瑾は直ちに運良を首座寮に招き、一山の大家に首座の運良に参学することを勧めている。ところが、大家がみな運良に参ずるようになり、そのため紹瑾は自ら住持の座を退き、運良が正式に住持となって南面して大家に臨んだというのである。

ただ、問題なのは肥後（熊本県）の広福寺に所蔵される「法衣相伝書」に、

紹瑾示、（花押）今以_二此伝衣并当寺住持職及聖教道具・当寺寄進状・讓状等_一、付_二囑素哲侍者_一。

于_レ時応長元年辛亥十月十日、大乘第二代紹瑾記。

という古文書が伝えられていることであつて、応長元年（一三一一）一月一〇日に紹瑾は侍者の素哲に対して法衣（袈裟）を伝え、さらに大乘寺住持職および聖教の道具や大乘寺の寄進状・讓状などを付囑している事実が存する。これもつて直ちに紹瑾がこのとき大乘寺の全権をいまだ一介の侍者位にすぎなかつた素哲に譲つたのだと解する説もあるが、それは早計であつて住持職については何れ素哲にすべてを託することを確約した証文と見るべきものと思われる。ちなみに「光禪開山老和尚行業記」によれば、

正和丙辰、山讓_二大乘席於伝燈良禪師_一。依_レ之、師遊_二歴東西_一、特訪_二諸善知識_一、到处皆蒙_二印可_一。

とあり、正和五年（一二三六）に紹瑾が大乘寺の後席を運良に譲ることになり、これを契機に素哲は諸方の善知識に参学すべく歴遊の旅に出たのだと伝えている。『永光寺年代記』においては「応長元年辛亥、瑩山和尚、大乘退院」と異筆

または後筆と判断される文字で記されているが、その一方で正和五年の箇所に、

(正和)五丙辰、瑩山和上、大乘寺退院。運良和上、大乘寺入寺。

と記されているが、この記事は棒線（棒線）で抹消されている。おそらくもとと正和五年と伝承されてきた記事が後世の手が加わって先の譲与状を踏まえた応長元年のこととして改められたものであろう。ただ、「光禪開山老和尚行業記」と『永光寺年代記』にともに正和五年に紹瑾が大乗寺を退いて運良が新たに入院した事実を伝えているのは重要であろう。これに対して『大乘聯芳志』や『安樂山産福禪寺年代記』によれば、紹瑾が大乗寺住持を退院したのは文保元年（一一三一）のこととされており、「光禪開山老和尚行業記」とは年時に一年の開きが存している。そのいづれにせよ、正和五年から文保元年にかけて紹瑾は富樫家方が修造した能登酒井保の洞谷山永光寺に入院開堂の式を挙げるために、大乘寺の住持職を退いて後席を法燈派の運良に委ねていることになろう。

ところで、「仏林恵日禪師行状」によれば、運良は正式に住持として南面して大衆に臨むや、山内の鳴らしものなど行持規範を臨済風に変え、しかも棒喝を駆使した厳格な学人接化をなしたとされ、それまで開山の義介や第二代の紹瑾が培ってきた大乘寺の風規を一変せしめたものようである。

運良が久しく大乘寺に止住しつづけたこと、そのあまりの変革振りに対して、紹瑾もしい不安を募らせていったのか、元亨三年（一一三三）一〇月九日に永光寺の紹瑾はゆかりの八箇寺の維持に関する置文の中で、大乘寺について興味深い記載をなしている。すなわち、大乘寺本『洞谷記』の「山僧遺跡寺寺置文記」には、

大乘寺者、先師開法之加州第一之貴寺也、門徒中可住持遺跡也。今暫雖不如意僧止住管領、開山素意、当家興行為望。且那在正理時者、門徒中尊宿中可住持興行。是又永平一二三代之靈骨安置所也。門徒中可再興勤行寺院也。門派可存此旨。

という内容が記されており、流布本『洞谷記』の「山僧遺跡寺寺置文記」では「不如意僧」に「法燈下伝燈寺雲良和

尚」という注記が付されている。大乘寺は先師義介が開法した加賀第一の貴寺であり、門徒中で任持すべき遺跡であるが、いまは不如意の僧である運良が止住管領している。これはあくまで変則的なものにすぎず、開山義介の素意としては曹洞家で興行住持することが望みなのだと述べている。しかも、その原因として檀那である富樫氏が正理になかったことを挙げており、道元・懐奘・義介という永平寺三代の祖師をまつる廟所である大乘寺がその門徒の尊宿によつて維持されていない現状を憂い、門下の人々にその旨を存知しておくべきことを論じている。このように晩年の紹瑾には能登の永光寺あるいは総持寺にありながらも大乘寺の運営に腐心苦慮する姿が付きまといつている。

覚明と瑩山紹瑾の関係

ところが、そんな運良との確執がしだいに表面化していく中であつて、いま一人の法燈派の禪者である孤峰覚明が永光寺の紹瑾の席下に投じている。「孤峰和尚行実」によれば、

還參能州洞谷瑩山瑾和尚、欲探洞上宗風。師亦誓云、不了畢大事、再不_レ出_二此山_一矣。寺之土地預告報師之來、兼第一座者(号_二明峯_一)夢_レ寺之土地命_レ行者_一令_レ備_二珍饈茶菓_一云、今日入唐僧覚明者可_レ來。此寺_上。明日果腰袍而入_レ寺。第一座見_レ之而逆問云、新到名阿誰。師云、覚明。第一座云、長老及土地者昨夜報_二子來_一也。乃拉_レ師上_二方丈_一。瑾和尚見_レ來立問云、和漢兩朝參_レ得何辺事。師以_レ手指云、前面法堂、背後方丈。瑾首_レ肯_レ之、携_レ手共入_二寢堂_一。臨機応酬、無_レ所_二滯滯_一。自_レ是一衆改觀。掛錫之後、脚弗_レ越_レ闕、脇弗_レ即_レ席。三年瑾云、汝種草不_レ凡、伝燈一千七百旧公案、一一拈來、共_レ汝商量、毫髮無_レ差、吾之与_レ汝因縁感發、猶如_二磁鉄_一。有時室中私驗、師拳話云、如何是室中人。師云、無_二依倚_一而孤露坐。瑾以_レ謂、是即是、以後定不_レ為_二我家種草_一。雖然如_レ是、法無_二二法_一、寧有_二偏党_一乎。我家有_二仏祖正伝菩薩戒血脈_一、宗門_一大事因縁也。即今付_二屬於汝_一、尽未來際莫_レ令_二断絶_一矣。師遂授_二持_一之。仍記曰、此去住_二雲州_一、以後必為_二帝王之師_一。即夜半三更、故教_二師去_一矣。蓋懼_二衆之憎嫉_一也、恰類_二嶺南能_一也耳。

として、かなりの紙面を割いて紹瑾との関わりが記されている。入元して中国元朝の江南禅林を歴遊して帰国した直後の覚明は、直ちに永光寺に到って紹瑾を訪ね、その門に投帰しているが、その仲介を執っているのは覚明の来参を靈夢によって知った首座の素哲であったと記されている。覚明のことばとして「大事を了畢せずんば、再び此の山を出でず」とあるから、覚明がかなりの覚悟を懷いて紹瑾の門を叩いたことが窺われる。おそらく覚明としてはそれまでの日本・中国における遍参になお満足しきれないものがあつたか、あるいは辨道修行の最終段階を紹瑾の門に投じて成就したい意向が存したものであろう。

ただ、著名な中国禅者に歴参して帰国した覚明が、なぜ紹瑾を新たな参学の師と仰いだのであろうか。法に中国と日本の差などないことを自覚した覚明は紹瑾の名声が北陸に高いことを聞き知つてその門に投じたというが、こうした背景には本師の覚心がかつて道元に参じて菩薩戒を受けたこと、参師の法明が晩年の道元に参じたこと、法明に得度を受け覚心の法を嗣いだ同門の運良が紹瑾の信認を得て大乘寺に任持していたことなど、諸般の事情から紹瑾の禅に関心を持ち、紹瑾のもとで真の安心を得ようとしていたのではなからうか。覚明が紹瑾に参じたのは元亨三年（一二三三）頃から正中二年（一二三五）七月に及ぶ紹瑾の最晩年に当たっており、入元帰国を果たして会下に到つた覚明に対し、紹瑾は中日両国の禅林を闊歩して得たところのものとは何かを尋ねている。また「孤峯和尚行実」の記載から、紹瑾が一七〇〇則の公案すなわち『景德伝燈録』に基づく古則公案の参究を覚明に課していたことが知られ、紹瑾の接化の具体性が窺われて興味深い。

一方、大乘寺本や流布本の『洞谷記』には、覚明に関する記述が随所に見られ、覚明が如何に紹瑾の信認を得ていたかが偲ばれ、紹瑾もまた自らの晩年に忽然と目の前に現れた覚明を高く評価している。如浄や道元の廟所である五老峰の靈泉にちなむ商量、戒法の授与に関することから、紹碩や素哲らを巻き込んだ隠山山居にちなむ問答、『涅槃経』の塗毒鼓の譬えと法眼宗の天台徳韶（八九一—一九七二）にちなむ因縁などが紹瑾と覚明の間で交わされており、紹瑾が

如何に覚明の力量に期待していたかが実感される。

そんな中でも注目すべきは、大乘寺本や流布本の『洞谷記』に、

同七月二日、当山住次尊宿先、瑩山法嗣中、揀三嗣法臘次、可住持興行。吾有三四門人、若又有二人孫弟法嗣敷。又住持闕如者、六兄弟中、励力束蔑、興化利生。是山僧現存悉知、尽未来際、法孫相統者、可依各人興法利生。唯願、法孫歷代、代弘揚化、化他不斷絶矣。

正中乙丑初秋二日記。明峯・無涯・峩山・壺菴・孤峯・珍山。

という記事が存することであり、正中二年七月二日に紹瑾は将来の永光寺の維持発展を図るために門下の四門人六兄弟を決め、四門人とその門流による伽藍の維持を望み、ときとしてはさらに二人を加えた六兄弟による住持の継承維持すら定めている。四門人とは明峰素哲・無涯智洪（?—一三五二）・峨山韶碩・壺庵至簡（?—一三四一）という四人であり、六兄弟とは彼らに孤峰覚明と珍山源照を加えた六人のことであるが、紹瑾が法燈派の覚明をあえて第五番目に列していることはきわめて異例のことであり、四門人の系統のみで住持を維持できない場合、覚明およびその門流の禪者が永光寺に住持することを認めており、覚明を明確に門下の一員として扱っているわけである。また同じく大乘寺本や流布本の『洞谷記』には、

同（七月）廿八日、溪都寺・道都寺、相伝戒法。同日夜半、明兄附法、相伝坐具。是予末後法嗣也。即曉天出寺、往雲州。

という記事も存している。これによれば、七月二八日の夜半に紹瑾は覚明を正式に法嗣の一員に列し、法を付して坐具を相伝しており、自ら覚明を末後の法嗣であると認めている。しかし、その直後、二九日の暁天に紹瑾は早々に覚明を永光寺から出奔させ、出雲へと向かわせている。この点は「孤峯和尚行実」でも確かめられ、さらに紹瑾が覚明に対して後に帝王の師となることを記別したことになっている。これら覚明に対してなされた事跡は、ときあたかも

紹瑾が大乗寺の運良を不如意の僧として位置付けたのとはほぼ同時になされており、紹瑾の微妙な心情を窺わしめる。覚明を法嗣と認めて出雲に赴かせて間もなく八月一五日に紹瑾は六二歳または五八歳の生涯を終えている。

出雲に下った覚明はやがて後醍醐天皇の信認帰依を受ける因縁に恵まれており、そのことが覚明を歴史のうねりの中に巻き込んでいくことになる。元弘の変で隱岐(島根県)に流されていた後醍醐天皇はまもなくこれを脱出し、伯耆(鳥取県)の船上山に行在所を置き、近隣に名僧として名を馳せつつあつた覚明を招いて道を問うている。「孤峯和尚行実」によれば、

元弘初、天下難乱、龍旆坐蒙塵、朕幸隱島、譬如祿山之叛、明皇幸蜀、駐鸞輿於万里橋。師方是時也、接武山呼。明年鳳輦再還、幸於伯州船上山、仍延師問道、以至奉授衣鉢戒法。皇情大悅、特賜雲樹国済国師徽号宸翰矣。方符瑾和尚記別也。又奏寺額賜天長雲樹興聖禪寺。蓋雲樹二字、師往昔夢於雲門參畫樹之因縁而有感矣。今之師号及寺額、実有所由耳。

とあり、覚明は後醍醐天皇の勅問に応え、親しく衣鉢や戒法を授けている。これに悦んだ後醍醐天皇は覚明に国済国師の勅号を賜い、その開創した禅刹にも雲樹寺の勅額が贈られているが、「孤峯和尚行実」ではこれをとくに紹瑾の記別に符合したできごととして特筆している。覚明が京都に上つて後醍醐天皇より国師号の綸旨を受けたのは建武二年(一三三五)一〇月五日のことであり、建武政権が崩壊して後もその関係はつづき、覚明は雲樹寺とともに和泉(大阪府)高瀬の大雄寺を拠点とし、南朝方の精神的な支柱の一躍を担って活動している。後醍醐天皇が逝去した後、南朝の正平二年(北朝の貞和三年、一三四七)四月三日には後村上天皇より金襴の袈裟が覚明に贈られており、三光国師という加号も賜っている。しかも覚明が開山に拜請された大雄寺は南朝の願門として、京都禅林の南禅寺と同格の勅願寺に列せられたとされる。

大乘寺僧団の動揺と伝燈寺・興化寺の成立

一方、覚明が後醍醐天皇の帰依を得て中央に進出していた時期に、加賀・能登においては曹洞禪者と運良との間で不穏な事態が勃発している。紹瑾の亡き後、能登の永光寺を継承したのは素哲であり、能登の総持寺を継承したのは韶碩であったが、加賀の大乗寺は運良がそのまま止住して化導を敷いていたのである。ところが、運良が久しく大乗寺に居座つたために曹洞禪者との間でしだいに確執が深まっていったようであり、運良は住持として伽藍の運営や山内大衆の掌握に腐心苦慮するようになっていく。「仏林恵日禪師行状」によれば、

海衆之中、六群之党、以_レ違境_レ撼_レ之。師雅不_レ事_レ物、即蹈_レ破彼鉢多_レ、勇退乘_レ寺、如_レ視_レ脱_レ屣。住_レ居白山之麓真光寺。時徒衆多染_レ癩、寺之土地妙理權現也、師呵_レ之投_レ河。由_レ是病僧不_レ日而皆痊。

という禅僧の伝記史料としては珍しくも不穏な記事が載せられている。大乗寺の大衆の中に六群の党という性根の悪い曹洞宗の過激分子があり、事あるごとに住持の運良の方針に楯突いたもののように、こうした悪辣な妨害に我慢しきれなくなった運良は住持の座を勇退して大乗寺を捨てたというのである。

運良が去った大乗寺に新たな住持として迎えられたのは、かつて運良にも参学し、紹瑾より大乗寺の全権を委託する文書を受けていた素哲であり、素哲は永光寺を同門の無涯智洪に譲り、これ以降、永光寺は年限を限って住持を交代していく輪住制によって伽藍が維持されていくようになる。一方、大乗寺に入寺した素哲は亡き紹瑾の意を体して義介や紹瑾の立場を守り、大乗寺をして再び曹洞宗寺院として機能させている。その後の大乗寺はほぼ素哲の門流すなわち明峰派の曹洞禪者によって独占的に継承維持されていくことになる。

ちなみに『大乘聯芳志』など後代の史料では運良は大乗寺の正式な世代からは外されて前任位に置かれているが、永光寺に所蔵される『血脈宗派并日本小宗派』には、

大乘寺世代古代之筋目之人數也。

開山、徹通老和尚。二代、鑿山瑾和尚。三代、恭翁良和尚。四代、明峯哲和尚。五代、無漏崇和尚。六代、松岩淵和尚。七代、珠岩珠和尚。

何時也、運良・素崇・旨淵、此三人ハ被削也。

という記事が存しており、古くは運良は開山の義介や第二代の紹瑾につづいて第三代の住持として明確に位置付けられ、後席を継いだ素哲は第四代となっている。この点、素哲の遺命を受けて第五代となった無漏素崇（一三〇九—一三五九）や運良に参じた経験を持つ第六代の松岸旨淵も何時しか前住位に変えられており、初期の大乘寺の世代は諸般の事情によつて多くの問題を抱えていたものらしい。後代の大乘寺では珠巖道珍（？—一三八七）の系統が住持の座を継承していったがために、道珍の直系でない運良・素崇・旨淵の三人が世代から外されたものようである。

また「仏林恵日禪師行状」によれば、大乘寺を去った運良はしばらく白山の真光寺に身を寄せているが、運良はこの寺で疫病に苦しむ徒衆のために寺の土地神としてまつられていた白山妙理大権現を川に投げ捨てるという暴挙ともいえる行動をなしており、これによつて病僧らの病いはまもなく平癒したとされている。白山妙理大権現は当時の曹洞宗教団が積極的に取り入れようとしていた護伽藍神であるだけに、運良が白山の麓下においてこうした大胆な行動を取っている背景には大乘寺の曹洞禪者に対する鬱憤のようなものすら感じられ、相当の覚悟を要したことが察せられるとともに、その強靱な精神を窺うことができよう。

ところが、運良はその後もなお大乘寺に程近い加賀の地に留まり、曹洞宗と一線を画しながら化導を敷いている。「仏林恵日禪師行状」には、

瑞応山伝燈寺之辺民覚円、始捨_二自産之莊田山林_一、創_二梵刹_一、請_レ師為_二開山始祖_一。（中略）宝光山興禪寺、亦師之權輿也。

（中略）後至于射水郡、剏_二建興化・兜率両寺_一、堂宇猗々、学者誦々。凡_レ巖臨_二四衆_一、則破_二諸方之邪解_一、一死_二学徒之偷心_一。

預其瞻法一者皆有益、所以緇白翕然嚮風、如優曇華一現於世。

とあり、運良が加賀小坂荘の地に覚円居士の帰依を受けて瑞応山伝燈寺の開山に請せられたことを伝えている。さらに運良は越中放生津にも進出して黄龍山興化寺を開創しており、この両寺を中心に独自の接化を図っている。また伝燈寺に近接した興禅寺や、興化寺に隣接した兜率寺などは尼寺として機能していたものらしく、運良が比丘や優婆塞(信士)とともに比丘尼や優婆夷(信女)といった女性層にも積極的な布教を展開していたことも知られ、こうした特徴は紹瑾・素哲・韶碩ら当時の曹洞禅者とも共通する面として注目される。

大乘寺を離れたとはいえ、伝燈寺や興化寺を中心とした運良とその門流は、なお曹洞宗とも積極的に交渉を保ちながら展開を図ったものらしく、『本朝高僧伝』の運良の章には、

州民有覺円居士、崇欽良徳、捨山林田畝、建梵刹曰瑞応山伝燈寺、請良為開山始祖。洞済包笠、不期雲集。

とあり、伝燈寺には曹洞宗と臨済宗の禅者が期せずして雲集同居したことを伝えている。また同じく越中に基盤を置いた同じ法燈派の慈雲妙意(清泉禅師・恵日聖光国師、一二七四—一三四五)の伝記史料である『越之中州摩頂山国泰開山恵日聖光国師清泉妙意禅師行録』にも、

恭翁良和尚、旧同宗骨、自従創開加陽瑞応勝基、道契交盟益篤僧矣。(中略)尋常済水遊泳之徒、或侍于枝側、或典庫役。洞谷之徒、亦多枚々。江湖仙声、頭角龍象、班々両序。諮参羣有、磨集雲委矣。(中略)同四年(曆応四年)、恭翁良和尚順化、引率徒衆、赴于瑞応。

という記事が存している。妙意は由良に赴いて最晩年の覚心に参じ、その指示で法兄の覚明の法を嗣いだとされる禅者であり、越中射水郡大田に摩頂山国泰寺を開創しているが、法伯の運良が伝燈寺の開山となってより道交を深めていたことが知られる。また国泰寺には臨済禅者のみでなく、洞谷の徒すなわち永光寺の曹洞禅者も多く参集していたことが記されているから、おそらく曹洞宗の大乗寺・永光寺あるいは総持寺などと、法燈派の伝燈寺・興化寺・国泰

寺などとは、同じ加賀・能登・越中を中心にかなり積極的な人的交流をなしていたらしいことが推測される。

「仏林恵日禪師行狀」によれば、運良は北朝の暦応四年（南朝の興国二年、一三四一）八月一二日に世寿七五歳で示寂している。『越之中州摩頂山国泰開山恵日聖光国師清泉妙意禪師行録』によれば、このとき国泰寺の妙意は徒衆を引率して伝燈寺に駆け付けたことが記されており、おそらく妙意は法伯の運良に後事を託されてその葬儀を執り行なったものと見られる。運良の示寂に際して大乘寺や永光寺の曹洞禪者が如何なる対応をなしたのかは伝えられていないが、『曹洞宗古文書』下巻「大乘寺文書」によれば、

一 夜碧岩并櫻欄弘子、以無尽侍者_二恭令_三奉帰入賜、尊重百拜頂戴奉持。仍自他之道德、周蒙_三於四衆、彼此之宗風、高扇_三於五湖之事、偏可_レ依_レ此一段_二者也。

康永乙酉十月十八日、住_二大乘_一素哲。（花押）

という文書が伝えられており、「光禪開山老和尚行業記」にも、

同年（康永乙酉）九月廿九日、自_二越中興化寺_一運良禪師所_二持去_一之一夜碧巖並櫻欄弘子、共是洞家重宝、事不_二容易_一、宜_レ奉_レ送_二大乘寺_一者也、云々。同十月十八日、師復_三書於興化寺_二云、一夜碧岩並櫻欄弘子、以_二無尽侍者_一、恭令_三帰入_二、尊重百拜頂戴奉持、仍自他道德周蒙_三於四衆、彼此家風高扇_三於五湖之事、偏可_レ依_レ此一段_二者也、云々。

という記事が存している。これらによれば、運良が示寂して数ヶ年を経た北朝の康永四年（南朝の興国六年、一三四五）九月二九日にかつて運良が所持したままになっていた一夜本『碧巖録』や櫻欄の弘子が越中放生津の興化寺より大乘寺に返還されている。興化寺側としてはこれらの品々が曹洞宗の重宝であり、興化寺にそのまま保管されているのを容易ならざる事態と捉え、侍者であった蔵海無尽を使者として大乘寺に遣わし、これらの品々を返還しているわけである。これらの品を受け取った大乘寺の素哲は一〇月一八日に請取状として返書を興化寺に送り、百拜して頂戴奉持したことを語り、両派の和睦がなつたことを悦んでいる。ちなみにこのとき興化寺の住持が誰であったのかは定かでない。

ないが、おそらく無尽の師である絶巖運奇か法叔に当たる桂岩運芳（仏照禪師、？—一三七七）ではなかつたかと推測される。

仏慈禪師号と覚明の画策

さらにその後の事件として注目すべきは、覚明を通して亡き瑩山紹瑾に仏慈禪師号が下賜されようとする動きが存したことである。仏慈禪師号の宣旨とは、

上卿権中納言。

正平八年十二月八日、宣旨。

紹瑾上人、宣謚号仏慈禪師。

藏人左少辨兼左衛門権佐平時経奉。

というものであり、その写しが永光寺に所蔵されている。南朝の正平八年（北朝の文和二年、一三五三）—二月八日（仏成道日）に後村上天皇より宣旨が下され、亡き紹瑾に対して仏慈禪師の勅謚号が与えられている。しかも宣旨には覚明から総持寺の峨山韶碩に宛てられた副状として、

開山瑩山大和尚禪師之副状。

依_三窮老無_二合期_一、令_二進_レ僧_レ之_一候。洞谷開山大和尚奉_レ賜_二仏慈禪師勅_一、奉_レ令_二進_レ上_レ之_一、護_二仏法并戒脈_一之由承御尋勅。依_レ之深源長流、只須_レ崇_レ先代。勅定以_レ如此、雖_レ難_レ存_二大和尚指帰報恩_一之次第、古今仏祖依_二國王帰敬_一、仏法祖道尽_レ未来際勝躑、以_レ如_レ斯耳。千載影徂_レ心只在_レ之乎。恐惶敬白。

正平九年甲午三月二日、

覚明。（花押）

進上惣持寺堂上老和尚、御衣鉢侍者。

という文書が伝えられ、同じく覚明から韶碩への書状として、

上_二開山和尚書_一（瑩山和尚也）。

弟子（覚明自称也）老朽羸瘵、跋渉不_レ便、以故差_二專使_一具_レ状聞。今上降_レ勅、尊_二洞谷開山大和尚_一、贈_二賜_一慈禪師之号。今齋_レ勅奉上、又有_レ勅奏_二上法語并_レ仏戒血脈_一。再有_レ勅、曹洞一派_二縁_一、是深_レ源長_レ流、祇須_レ祝_二先代帝業_一、勅詔如_レ此。国王_レ帰敬、祖門金湯、不_レ亶_二亘_一古通_レ今。後之_レ又後輩_レ而堅者、悉出_二乎大和尚之勝蹟_一矣。弟子雖_レ沾_二大和尚子育之恩_一、其奈_二因縁不_レ契心事差池_一何、毘盧性海豈可_レ間然。慈宥是祈、恐惶敬白。

正平九年甲午三月二日、 覚明。（花押）

総持堂上老和尚、衣蓋侍者。

という文書も伝えられている。これらによれば、韶瑾への禪師号下賜には覚明が深く関与してその斡旋・仲介をなしており、積極的に総持寺の韶碩に働きかけをなしていたことが知られる。ただ、このとき覚明が永光寺ではなく総持寺の韶碩をその対象としているのは、すでに瑩山門下の僧録であった素哲が北朝の観応元年（南朝の正平五年、一三五〇）三月に示寂してより数ヶ年を経っており、曹洞宗における実質的な権限がかつての四兄弟でただ一人だけ存命であった韶碩に移行していた状況があり、さらに永光寺周辺が北朝方の能登守護吉見氏の支配下であったことなどを十分に踏まえての配慮と見られ、観応の擾乱から足利直冬の反乱など北朝方が動揺する中で、南朝勢力が総持寺の曹洞宗教団を懐柔すべくかなりの接近を図ろうとした事実を物語ることができる。

ところが、この申し出に対して総持寺の当住であった韶碩は覚明に対して書簡を返送しており、

禅_レ札旨委細承候畢、御勅諡送給候。永平開闢以来曾無_二其儀_一候間、依_二先師冥慮難_レ計候、還進候。於_二当家御翻復事_一、慰懇承候。尤雖_二本望候_一、由良御再住上者無_二其隱_一候。今更洞家と御称名難_レ信候。雖_レ然、若御素意無_二他事_一候者、為_二拜塔御下向候者_一、以_二面謁_一可_レ令_レ申候。当寺開山仏事料足事、当家門派未_二落居_一候間、不_レ及_二領掌_一候。諸事使節僧令申候。恐惶

謹言。

八月十三日、

惣持寺韶碩。(花押)

進上雲樹寺方丈、侍者御中。

という仏慈禪師号を返上する旨の文書が伝えられている。韶碩が覚明に返書を送ったのは正平九年(文和三年)八月一三日のことであり、このとき韶碩は永平寺開山の道元より以来、曹洞宗には禪師号を拝受した先例などなく、また先師紹瑾の意もすでに計れないことから、勅諡号を返上するという旨を述べている。しかも韶碩としては南朝・北朝のいずれの年号をも使用しておらず、単に月日のみを記しているのにも惣持寺側の苦慮のあとが察せられ、南朝からの誘いを婉曲に断っている。

さらに書簡から窺える事実として、法燈派の本山である由良興国寺の住持を再度にわたり勤めたほどの覚明が、この時期においてもなお紹瑾の三〇回忌か三三回忌を前に曹洞宗に転派したい意向を韶碩に告げることが挙げられる。韶碩は覚明に対してその申し出も断っているが、紹瑾の墓塔に詣でて拝登嗣法し得る可能性だけは認めている。おそらく覚明が紹瑾の印可を得て六兄弟に列していた事実を踏まえての処置であろうが、韶碩としては覚明がすでに法燈派を代表する立場にあり、曹洞宗への転派などは覚明ひとりの問題に済まず、覚明の門下さらには法燈派全体に関わる大事となることを懸念しての対応でもあったものと見られる。ちなみに「孤峯和尚行実」には仏慈禪師号にまつわるような事情はまったく記されておらず、覚明の法嗣である聖珍としてはそうした不首尾に終わった不祥事ともいふべき内容は伝記に載せたくなかったのであろう。

いずれにせよ、覚明が生涯にわたり紹瑾の禪に私淑し、紹瑾を先師と仰いで常に子育ての恩を懐きつづけていたことは疑いなかろう。仏慈禪師号の斡旋も南朝方の懐柔政策とともにそうした覚明自身の私情から出たものであろうが、韶碩の返書によるかぎり韶碩は仏慈禪師号を返上していることになり、南朝への接近はなされなかったと解さざるを得ない。

得ない。おそらく韶碩としては能登における北朝勢力の挽回など時勢の動きを的確に捉え、南朝方からの誘いを婉曲に拒絶したものであろう。ただ、後世に著された紹瑾の伝記史料には仏慈禪師の勅諡号が概ね使用されており、これを如何にとらえるべきかが改めて問題となろう。その間の事情はいまだ明確にされてはいないが、おそらく宣旨の写しや覚明の書簡がそのまま永光寺あるいは総持寺に保存されていたがために、後代の曹洞宗の人々がこれをもとに仏慈禪師号を紹瑾に下されたものと即断して使用するようになったというのが実情であろうか。

運良と曹洞宗旨

では、運良や覚明はどのような学人接化をなしていたのであろうか、つぎにこの点について考察をなしておきたい。運良の場合は実際に曹洞宗の拠点であった大乘寺に入院し、曹洞禪者の中に入って法燈派の禪風を振っており、棒喝を駆使した厳格な接化を特徴としていたことが知られる。当然、その頃の大乗寺にはそれまで義介や紹瑾に従っていた曹洞禪者と運良を慕う法燈派の臨濟禪者が共存していたはずであらうから、宗旨の交流はより具体性を帯びていたはずであらう。後に運良は大乗寺を出て伝燈寺や興化寺に活動の拠点を置いているが、地域的には瑩山下の曹洞宗と地を一にした展開がなされているから、引きつづき運良は曹洞宗との共存を図らざるを得ない立場にあったといつてよい。運良には五山十刹の臨濟禪者のごとき風貌は希薄であり、むしろ地方展開を目指した在野の曹洞禪者のごとき逞しい生き方が存したもののようである。

とところで、『禅林諸祖行状』五の巻末には京都建仁寺の桂岩運芳が同門の絶巖運奇の頂相に対して付した「長慶開基絶巖和尚贊」が伝えられているが、その内容は、

奇岩絶岳大壚嶮、万仞峯頭誰得_レ玄。理_二摩訶衍之條_一、掃_二除洞山五位_一、抛_二新善光之址_一、提_二起法灯三伝_一。万象側_レ耳、虚空擎_レ拳、打破無門関、大行_二不伝正令_一、掀_二翻仏患海_一、宏次_二未了勝縁_一。無_レ端将_二戒定惠三学_一、偏作_二漫天網子_一、向_二北海路_一、鯨

涛之雨、欄空一撒。直得、大光普照包日月、醒風無碍匝坤乾。掲示末後全機、喫茶珍重、拳揚向上的旨、栗棘金圈。宝劍出、亟光射斗、妙用縱横瞎驢辺、曠劫恩波瀾無底、毘盧藏海月明天。

絶岩和尚慈相、妙雲寺藏海長老請讚。

建仁師叔運芳拜書。

というものである。また『延宝伝燈録』卷一五「越中州護国山長慶寺絶巖運奇禪師」の章によれば、

越中州護国山長慶寺絶巖運奇禪師、初遊洞家門闕、研究五位。帰恭翁輪下、開悟本源、為長慶第一世。臨終集諸徒曰、示汝等末後緊要処。良久曰、喫茶珍重。即時脱去。

とあり、同じく『本朝高僧伝』卷三四「越中長慶寺沙門運奇伝」によれば、

釈運奇、字絶巖。初遊者宿之門、明洞上之旨趣。後届賀州伝燈寺、参恭翁良禪師、伝持衣鉢。越中檀越、慕奇風義、開護国山長慶寺、請為開山始祖。向北之禪侶、多帰輪下。臨終集徒曰、示汝等於末後全機。良久曰、喫茶珍重。奄然就化。有弟子無尽、号藏海。賀州檀信、剎龍興山妙雲寺、招為第一世矣。

と記されている。これらによれば、運良の高弟である絶巖運奇は初めに曹洞禪者に参じて五位思想をよく理解し、曹洞宗旨にも精通した人であつたらしい。当時、曹洞禪者で五位を唱導していたのは素哲や韶碩であるから、おそらく運奇はそうした瑩山下の曹洞禪者に参じて曹洞宗旨の研鑽に努めていたのであろう。その後、運良の門に投じた運奇は『無門関』を参究し、運良の衣鉢を伝持しているわけである。

当然、そうした運奇の消息を記している同門の運芳もまた曹洞宗旨に通じていたものと見られ、この贊を運芳に依頼した加賀妙雲寺の藏海長老というのも、かつて大乘寺に素哲を訪ねて一夜本『碧巖録』などを返還したことで知られる藏海無尽にほかならない。おそらく無尽もまた素哲とはかなりの面識があつたはずであろうから、運良の門下の人々には曹洞宗と関わりの深い禪者が多かつたものと推測される。

覚明と曹洞宗旨

では、覚明の場合ほどのような接化をなしていたのであろうか。「甲州塩山向岳庵開山抜隊和尚行実」によれば、抜隊得勝（一三二七—一三八七）が出雲の雲樹寺に到って覚明の門に投じた際の消息として、

即到_二雲州_一謁_二雲樹_一。（中略）師借_二宿於雲樹門前_一居、而交_レ衆稀。寺中老宿語_レ師曰、上座何不_レ掛搭本寺耶。師曰、某甲不_レ為_レ學_二孔子法樣_一來。老宿曰、還持_二血脉_一麼。師曰、血脉在_二何處_一。老宿曰、上座未知、堂頭和尚自_二洞谷和尚相伝、而今盛行_レ之。師曰、凡所有相皆是虛妄、仏祖血脉非_二恁麼事_一。有時國師語_レ衆曰、此事不_レ在_二言句中_一、只放_二下一切_一、徹底不思量、脱体現成。（中略）國師還問_レ師曰、趙州因_二什麼_一道_二箇無字_一。師勵_レ声曰、山河大地草木樹林、尽參得。國師咄曰、你将_二情識_一道邪。師於_二言下_一忽爾如_レ失_二却命根_一、似_二桶底脱_一、徧身汗流。

という問答商量が記されている。注目すべきは覚明が洞谷和尚すなわち紹瑾より伝授された瑩山下相伝の血脉を盛んに授与していた事実が知られることであろう。もちろん、覚明の接化はそれのみでなく、同時に「只放下一切、徹底不思量、脱体現成」という説示や趙州無字の参究などもなされている。

覚明が紹瑾より相伝した血脉を門人らに授与していた事実を証するかのごとく、出雲の雲樹寺には永光寺の紹瑾より相伝した『出家授戒略作法文』一卷が所蔵されており、そこには「元亨四年甲子六月廿八日、書_レ之授_二明庵主_一。能州洞谷開山紹瑾示。瑩山紹瑾」とあり、また「元亨三年七月解制後日、登州洞谷山永光禪寺到_二于方丈_一、伝_二授之先法花經_一、次受_二梵網經_一已、次受_二伝_二二本聖經_一已。渡宋比丘覚明五十三。為_二明融_一授与已畢。孤峰覚明」と記されている。これによれば、覚明は元亨三年七月の解制後に永光寺の方丈において紹瑾より親しく『法華經』『梵網經』を伝授され、元亨四年六月二十八日には紹瑾自筆の『出家授戒略作法文』を授けられていることが知られる。しかも雲樹寺を開創して以降のことであろうが、門人の明融（無著妙融のことか）に対してその『出家授戒略作法文』をさらに授与している

ことが知られる。

また「大明禅寺開山月庵和尚行実」によれば、大応派の月庵宗光（正統大祖禅師、一三二六—一三八九）が雲樹寺の覚明に相見した際、消息として、

夏罷到雲州、乃見孤峰于雲樹。峰以高賓待之、而師自充侍聖、後命掌藏鑰。扣問請益不捨昼夜、限以一夏、參決宝鏡三昧重離二字。峰遂授三五位要訣。每自疑曰、其心言所及、是實、喚甚麼作主。遂質峰、擲下手中扇子。師当下釈然。

という機縁が伝えられている。覚明は蔵主として夏安居をともした宗光に対して、『宝鏡三昧』の「重離」の二字を参究させ、ついには曹洞五位の要訣を授けたことになっている。同様に『安養開山勅諭正眼智鑑禅師年譜』によれば、同じ法燈派の大歌勇健（正眼智鑑禅師、一三三一—一三八三）が大雄寺の覚明に参学した際、消息としても、

貞治元年壬寅、師三十四歳。見三光于大雄山、問答数回、乃蒙印可、君臣五位秘決授之。其歳五月廿四日、逢三光国師之示寂。晦三泉之海蔵、海雲老兄住、往焼香。

と記されており、北朝の貞治元年（南朝の正平一七年、一三六二）に会下に到った勇健に対し、覚明は問答すること数回にして印可を与え、やはり曹洞宗の君臣五位の秘訣を授けている。ただし、覚明の示寂は正平一六年（一三六一）五月二四日であるから、この記事には一年のずれが存することになる。ともあれ、このように覚明は偏正五位や君臣五位など曹洞宗旨を機関として積極的に用い、自らの接化の基準として学人に授与していたことが知られる。

また雲樹寺に所蔵される覚明自身の墨蹟として

我宗玄理更無思儀之处、修行心印单伝修行。若涉于擬議、七花八烈也。只放下一切心境、不思量底則脱体现成、是則即今底也。不可陵夷、不可聊爾、捷矣捷矣。

正平辛丑仲春日、住大雄一度宋比丘孤峰覚明書。

という大雄寺で示した内容が知られるが、そこには「只放下一切心境、不思議底則脱体現成」のことばが示され、覚明は最後までこの立場を貫いたものらしく、非思量の坐禅を重視している。さらに同じく雲樹寺に所蔵される法嗣の古劍智訥（仏心慧燈国師、？—一三八二）が覚明の頂相になした賛においても、

烹煉洞下必死之靈丹、喪尽臨濟嗜驢之正宗。賓主穆時兮雪覆松徑、君臣合処兮雲遮花冠。無限蝦蟇家業自安、随例納僧口裏餐鑽。孤峰独立千古勝様、三光燦爛万物段観。雲樹嶺頭月照天心、瑞塔脚下水澄波瀾。

正平庚戌涅槃之前日、叩首拜讀。古劍智訥。

とあり、ここでも覚明が曹洞と臨濟の両宗旨を兼ねた接化をなしたことが特筆されており、曹洞宗の君臣五位と臨濟宗の四賓主をもとに用いたとされている。これらはいずれも覚明が実際の接化において紹瑾より伝えられた血脈を授け、五位の曹洞宗旨をもつて証明の基準としていたことを示すものである。ただし、覚明の五位導入がすべて紹瑾との関わりから指摘されるとは言いがたく、あるいは在元中に参学した曹洞宗宏智派の雲外雲岫（妙悟禪師、一二四二—一三二四）からの相伝であるのかも知れない。

このほか、越前長蘆山興禪寺所蔵「不見和尚行状之記」や『本朝高僧伝』卷三八「能州総持寺沙門明見伝」などによれば、出雲の出身で幼くして雲樹寺の覚明に受戒した不見明見（一三四七—一四一〇）は後に峨山下の通幻寂霊（一三二二—一三九二）の法を嗣いでいる。また『洞上聯燈録』卷三「和州宝陀山補巖寺了堂真覚禪師」の章によれば、大和（奈良県）結崎の出身で紀伊の能仁寺で弟子となった了堂真覚（一三三〇—一三九九）は大雄寺で覚明の最期を看取つてから総持寺の峨山韶碩に参じており、やがて太源宗真（？—一三七一）の法を嗣いでいる。また「豊後国国崎郡妙徳山泉福禪寺開山無著勅諡真空禪師行道記」や『仏祖正伝記』「七祖豊州妙徳山泉福寺開山妙融禪師」および『弘化系譜伝』卷三「真空禪師無著妙融大和尚年譜」などによれば、大隅（鹿児島県）の日野氏の出身である無著妙融は遠く由良の興国寺に赴いて覚明に参じて「不思議底、脱体現成」の指導を受け、やがて薩摩（鹿児島県）に帰って峨山下の無外

円昭(円照とも、一三二一—一三八一または一三〇八一—一三七二)に法を嗣いでいる。彼らはいずれも覚明に学んで後に曹洞宗とりわけ峨山下へと流れており、覚明と韶碩との関係は仏慈禪師号の返上以降も断絶してはいないことが確かめられる。しかも単に覚明が曹洞禪者と交流が深かったというだけでなく、覚明の禅には曹洞宗的な色彩がきわめて濃厚であったものと見られる。

その上、こうした傾向は覚明ひとりに留まらず、法嗣である古劍智訥や抜隊得勝の場合にも窺われ、彼らの門下も曹洞宗との関わりが顕著なのである。先に挙げた不見明見は雲樹寺の覚明のもとを去って臨済・曹洞の禪匠を歴参した後、大雄寺の智訥に参学し、その後丹波(兵庫県)永沢寺に赴いて通幻寂霊の法を嗣いでいる。「玉龍山福昌禪寺開山石屋禪師塔銘并叙」などによれば、薩摩伊集院の島津氏の出身である石屋真梁(一三四五—一四二二)ははじめ京都禪林で修行した後、大雄寺の智訥に参じて機語が契いながらも、その席下を去って永沢寺の寂霊に法を嗣いでいる。『重統洞上諸祖伝』巻二「松隠寺太初覚禪師伝」などによれば、紀伊の出身である太初継覚(一三四五—一四一三)は大雄寺の智訥について出家し、後に太源派の梅山開本(一三三九?—一四一七)の法を嗣いでいる。「傑堂能勝和尚大禪師行実録」や「耕雲種月開基年代並傑堂和尚行状及謙宗年譜私録」その他によれば、河内太守の楠正儀の子である傑堂能勝(俗名は正能、一三五五—一四二七)は、戦乱で足を負傷したのを契機に大雄寺の智訥に投じて出家し、智訥の示寂を契機に永沢寺の寂霊の門に投じ、さらに越前の龍沢寺に到って開本の法を嗣いでいる。『重統洞上諸祖伝』巻二「青蓮寺綱菴宗禪師伝」などによれば、美作(岡山県)の赤松氏の出身と見られる綱庵性宗(一三五二—一四三四)は峨山下の実峰良秀(?—一四〇五)に就いて出家して後に大雄寺の智訥に謁しており、その後良秀の法を嗣いでいる。

一方、『洞上聯燈録』巻四「相州大慈大綱明宗禪師」の章によれば、甲斐(山梨県)の出身である大綱明宗(一三六三—一四三七)は、はじめ塩山向岳庵の抜隊得勝に就いて得度し、相模(神奈川県)の大雄山最乗寺に到って通幻下の了庵慧明(一三三七—一四一一)に謁して法を嗣いでいる。また「広園開山峻翁山和尚行録」などによれば、得勝の法嗣

である峻翁令山（法光円融禪師、一三四四—一四〇八）は、得勝らに学んだ後、永沢寺の寂靈に謁して器重せられている。このほか『重統洞上諸祖伝』巻三「荣林寺直伝賢禪師伝」などによれば、伊勢の出身である直伝玄賢（？—一四一三）が由良において剃髪受戒して後、豊後（大分県）泉福寺の無著妙融に学び、遠江（静岡県）の雲巖寺で無著下の洞巖玄鑑（一二四一—一四〇九）の法を嗣いでいるが、これも由良の法燈派の禪者との関わりとして注目される。また田島柏堂「新資料山上氏所蔵写本『塩山開山法語』・『絶学伊路波歌』・『瑩山帝尊問答』の研究」（『愛知学院大学文学部紀要』第一〇号）によれば、紹瑾の『十種勅問』の異本である『瑩山帝尊問答』が抜隊得勝の『塩山開山法語』と得勝の法孫に当たる絶学祖能（一三五四—一四二八）の『絶学伊路波歌』（内題は『伊路波歌月江菴絶学和尚御歌』）とともに書写された資料なども紹介されている。

このように覚明およびその門下は曹洞宗旨を積極的に受容し、かつ峨山下の曹洞禪者と積極的な交流を結んでいるのであって、北陸の曹洞禪者と展開地を同じくしていた運良が曹洞宗旨を理解しつつも一定の距離を置いて臨済宗旨を保持せんとしたのとは対照的である。覚明の場合、紹瑾の下を去って出雲や和泉など遠方にあつて化導を敷いたがために、かえつて紹瑾の禪ないし曹洞宗旨に対する思慕の情が一段と募つたのではなからうか。

運良・覚明と撰述禅籍

では、運良と覚明に関わる禅籍としては如何なる語録や著述が存したのであろうか。「仏林惠日禪師行状」によれば、運良の著述について、

欲_レ昭_二示_一後來、使_レ仏祖法眼不_レ減、故有_二正法眼蔵之語_一。禪戒正伝破_レ佗邪網、故有_二血脈相承之訣_一。愛_レ人及_レ物等_レ之以_レ慈、故有_二仮名見性鈔_一。怒罵嬉笑莫_レ非_二仏事_一、故有_二種々法語_一。

と記されており、運良には『正法眼蔵語』『禪戒正伝血脈相承訣』『仮名見性鈔』および種々の法語が存したとされる。

ほかにも運良には『恭翁和尚語録』または『仏林恵日禪師語録』といった表題の語録も若干ながら編集されたものらしい。この中で『正法眼蔵語』と『禪戒正伝血脈相承訣』は曹洞宗との関わりからも注目され、『仮名見性鈔』は臨済宗における仮名抄物の先駆としても興味深い。

しかし、運良の著述や語録はいずれも現存していないようであり、とくに語録にはおそらく運良が大乗寺でなした消息やその後の伝燈寺や興化寺における活動が記されていたはずであろうから、それらの散逸は運良個人の消息のみでなく、加賀・能登・越中における初期の曹洞宗と法燈派の交渉の歴史を知る上でもまことに惜しまれてならない。

さらに覚明の著述や語録については「国済三光国師塔之銘」に、

説法有_二四会録_一、著_二徹心録_一一卷、伝_二三代_一。

と記されており、覚明にはおそらく『孤峰和尚語録』か『国済三光国師語録』といった表題と見られる語録が編集され、また『徹心録』という詩文集も別個に存し、ともに後代に伝えられたと記されている。覚明の語録は四会録であったとされるから、おそらく出雲の雲樹寺と由良の興国寺と京都の妙光寺と和泉の大雄寺という四ヶ寺でなされた上堂説法や法語・偈頌などがまとめられていたものと見られ、これに紀伊の雁蕩山能仁寺などにおける偈頌なども若干ながら含まれていたはずであろうが、残念ながらいまだその現存は確認されていない。一方の『徹心録』については、龍谷大学図書館に写本一卷が所蔵されていたらしいことが駒澤大学図書館編『新纂禅籍目録』や『国書総目録』などに記されているが、すでに龍谷大学図書館では『徹心録』は所在不明となっており、その散逸もまことに惜しまれてならない。今後、覚明の語録や『徹心録』が発見されることがあれば、覚明自身の事跡がさらに明確になるとも、覚明が永光寺の紹瑾やその門下とどのように関わったのか、さらに晩年における総持寺の韶碩との仏慈禪師に關するやり取りなど、曹洞宗との関わりを知る上でも貴重な消息が判明するはずであろう。

運良・覺明と神人化度の説話

運良には多くの奇瑞や神人化度の説話が知られており、また衆生済度の慈悲に満ちた行化も伝えられているが、それらはその後活躍する曹洞禪者たちの化導とも重なる特徴といつてよい。「仏林恵日禪師行状」によれば、

往_レ越取_二途於直生山_一、因詣_二八幡神祠_一、向_二廟中_一而尿。巫祝蠱怒。神託曰、我特恭_二敬此師_一、汝等慎勿_二触忤_一。巫皆戰_レ手駭異。

という逸話が伝えられており、これは運良が越中の埴生八幡宮で神祠に向かつて放尿しながらも八幡神より神託を受けるという内容である。同じく「仏林恵日禪師行状」には、

師野行之時、鷲鷲恒隨行。一日有_二螺螿_一、忽至_二于前_一。師喝便作_二設利羅_一。每_レ剪_二爪髮_一、或所_レ墮之齒牙、爭取_二藏玄_一、皆作_二舍利_一、若_レ綴_二金粟_一。時人不_レ名、指謂_二肉身仏_一。或時失脚踏_二著金剛經_一、師尚自若。侍僧見_レ之有_二懼色_一、即命投_二火中_一、燦然_レ經存。氷見海浜有_二岩石屹_二乎波心_一。師於_二其尖上_一、建_二石浮図_一。蓋師之心、欲_レ來_二往舟船_一。乃至海中鱗介之類、游_二泳于搭影_一者、共得_二結縁_一也。

という運良の神変にちなむ因縁譚なども載せられ、このほかにも示寂後の奇瑞までが載せられている。運良には禪僧としての厳しい一面とともに衆生に対する利他行に満ちた温かい側面が程よく混在していたことが窺われ、とくに運良が氷見の海浜にそそり立つ唐島に建立した石浮図（石塔）の消息などは灯台の先駆としても興味深い。

一方、覺明にもこうした逸話が伝えられており、「孤峯和尚行実」によれば、

康永元年春、有_レ僧詣_二本州大社神明_一、夜宿_二廊廡_一。坐睡之間、忽廟裏有_二声云_一、託_二雲樹長老_一欲_レ受_二持廿五条衣并応器_一、為_レ我伝語焉。僧諾_レ之、帰以告_レ師。師亦曾夢如_レ是。即使_レ人往_二伯州法華尼寺_一、而裁_二縫之_一矣。尼主亦曾語_二夢神明求_二袈裟_一之因縁_上也。又同令_二梓匠造_二袈裟篋_一。師即持_レ之、往授_レ焉。至_レ今廟中尚存矣。

とあり、出雲大社の神の神託を受ける因縁が伝えられており、実際に出雲大社の北島家には覚明が奉納したと伝えられる岨狗九条法衣と細布二五条法衣および袈裟包・坐具・香合・珠数入・頭陀袋などが保存されている。この中で岨狗九条の袈裟の方は「縦、右端四尺一寸五分、中二尺六寸五分、左端三尺二寸五分。横九尺六寸四分」とされ、細布二十五条の袈裟の方は「縦三尺七寸六分、横六尺三寸五分」とされており、ともに出雲大社の所蔵となっている。こうしたことがらは法燈派さらに曹洞宗を含めて禅宗展開における神人化度の説話としても説得力を持つ注目すべき内容といえよう。

同じく「孤峰和尚行実」には、

又居_三京師_一日、前_二条関白殿下有_三駕_レ車牛、夢_レ家人云、願_レ牽_レ吾往_三雲州長老所_一、欲_レ頂_三戴衣鉢_一、脱_レ畜生苦患、覺_レ以語_レ公、公許_レ之。牽_レ以至_レ彼、師_レ為授_三衣鉢_一、未_二幾日_一牛即斃矣。師_レ德感_三神明_一化_三異類_一、如_レ是也。

という因縁も伝えられている。前二条関白殿すなわち二条道平（左大臣・氏長者、一二八八—一三三五）の家舎に牛車を引く一頭の駕輿の牛が飼われていたが、ある夜、夢の中で二条家のある家人に「願わくは吾れを牽いて雲州長老（または雲樹和尚）の所に往かしめよ、衣鉢を頂戴して畜生の苦患を脱せんと欲す」と告げたとされる。家人は夢から覚めてこのことを二条道平に告げると、道平はこれを奇異なることとして許したという。家人が牛を牽いて覚明のところに来ると、覚明はこの牛を憐れんで衣鉢と三帰戒を授けている。そして、受戒した牛はその後わずか数日にしてたちまちに斃つたとされている。これは覚明の徳が異類（動物）にも感化を与えた逸話として広く知られたものらしい。

このように運良や覚明には神人化度の説話や広く衆生済度の逸話が見られるのであって、こうした内容はすでに師の覚心にその先例が見られる。このような法燈派の特色が運良や覚明と関わった曹洞禅者らにも大きな影響を与え、やがて曹洞宗が全国展開を果たしていく過程にも活かされ、多くの曹洞禅者が全国各地でその地域の諸信仰と共存を図りながら寺院を建立し、民衆の心を引きつけていく信仰形態を生んでいったとも推測されるのである。

おわりに

運良や覚明が大乗寺や永光寺の紹瑾と関わりを持った頃には、永平寺においても中興の義雲（一二五三—一三三三）が住持として活躍し、その門には曹洞宗宏智派（後に臨済宗大慧派に転ずる）であつた中藤円月（中正子・仏種慧濟禪師、一三〇〇—一三七五）も参学しており、大応派の月堂宗規（水月老人、一二八五—一三六一）もその門に投じて西堂を司つている。『東海一漚別集』「真賛」によれば、覚明の得度の小師であつた簡中元要らが円月に「孤峰和尚」の真賛を依頼し、これに応じた円月が覚明に対する四首の真賛を残している。その第四首に当たる真賛は元要の求めに応じたものであり、その全文を示すなら、

十九落髮、同条先仏、参禪鷹嶺、深得要領。杭海而去、探幽元土、徧参諸老、究到玄奥、礼塔護國、藏鑰為職。
附、舶錦還、榮炫鄉壖。指染洞宗、夢感明峰、臨機対応、無有濡滯。幾則古話、過如撥牌、授戒血脈、夜半密獲。

誅茅雲山、説法翻瀾。先帝幸伯、延師説法、皇情説預、徽号賜与。三遷由良、四靱瑜坊、雲行施法、法嗣繁滋。夫謂是雲樹三光国済正平天子之師。（小師元要求）

という内容である。そこには覚明が日本と元国で遍参した過程から住持となした活動、さらに後醍醐天皇や後村上天皇との関わりなどが述べられている。その中でも注目すべきは、永光寺の紹瑾を訪ねた際の消息が記されていることであり、首座の素哲が霊夢を感じたことや、紹瑾より血脈を授けられて夜半に密に心印を受け、出雲の雲樹寺で結庵した消息に触れている点であろう。かつて永平寺の義雲に曹洞宗旨を学んだ経験を持つ円月は、覚明の動向を通して能登における曹洞宗の躍進ぶりにもかなりの関心を示していたものと見られる。

以上、述べてきたごとく運良と覚明という法燈派のすぐれた二禅者が紹瑾に参じたことは当時の曹洞宗教団に大きな波紋を生じている。運良についていえば大乗寺の運営に関する問題であり、その後の曹洞宗との地域を一にした展

開である。また覚明についていえば嗣法の重授および政治権力との関わりの問題、さらに法嗣の慈雲妙意を含めた動向である。

運良が住持に就任したことによって大乘寺は住持職継承の上で大きな火種を抱えたのであり、臨済下の運良が大乘寺を勇退したことで一応の決着を得てはいるものの、そうした住持職のもめごとが逆に曹洞宗あるいは永平下としての自覚を強めることになり、他派への警戒を通して法統意識が培われていったともいえよう。こうして紹瑾および磐山門下の曹洞宗僧団は寺院運営のあり方を再認識させられたのであり、かつての永平寺における三代相論とともにこの騒動は初期曹洞宗史上に特筆されてよい大事件であったと見られる。紹瑾や素哲さらに韶碩などはこうした他派の禅者の入山や同派内の住持争いなどを未然に防ぐため、新たに拠点とした永光寺や総持寺を運営していく上で輪住制度を大胆に導入していくのである。

それまで中央禅林から隔たっていた北陸の曹洞宗が一躍、世の注目を集めるようになるのは覚明のはたらきによるところが大きい。紹瑾を先師と仰ぐ覚明はおそらく事あるごとに先師紹瑾の禅風を顕彰したものと見られ、南朝の動向を踏まえて紹瑾およびその門下の存在はしだいに人々の関心を引くようになっていったようである。たとえば紹瑾の作とされる『十種勅問』の類も実際には覚明と後醍醐天皇の間で交わされたものを、覚明が先師紹瑾にその徳を譲るかたちでまとめたのではないかと見られるふしもある。また覚明が法嗣の古劍智訥とともに門下の有能な人材をかなり曹洞宗に転向させるような動きも見せているのは、南朝方の衰頹を踏まえての配慮であったのかも知れない。

(註略)

② (法燈派略系図) … () は永平下の参学者。

